

11 当院における進行がんの在宅緩和ケアの経験

塚田 裕子・阿部 葉子・荘司久美子
日野浦裕子

在宅ケアクリニック川岸町

【目的】当院での進行がん在宅緩和ケアの現状について検討する。

【対象】平成21年7月開院から平成23年6月までに当院で在宅診療を行ったがん死亡104名のうち転帰日を把握している101名。

【結果】年齢は39～93（中央値70）歳、男性/女性は58/43名。居住地は中央/西/東/江南区が45/31/19/6名。原発巣は肺/消化管/乳/泌尿器/頭頸部/皮膚/その他が38/20/13/11/7/4/6名。在宅死が47名（在宅期間中央値35.5日、うち7名が一時入院あり）、病院死が43名（在宅期間中央値28.5日、入院期間中央値7.5日）、ホスピス死が11名（在宅期間中央値26日、入院期間中央値53日）であった。入院理由として肺炎併発による排痰困難が最多であった。

【結論】新潟市でも進行がん患者の在宅療養支援の需要は少なくはなく、急性期病院の在院日数短縮、ホスピスの待機日数軽減にも貢献できる可能性がある。

12 肺転移および肝転移に対する定位放射線治療

松本 康男・杉田 公・太田 篤
県立がんセンター新潟病院
放射線治療科

【目的】肺転移および肝転移に対する定位放射線治療の有用性について検討した。

【対象と方法】2005年7月から2011年2月までに肺転移/肝転移に対して定位放射線治療を施行し3カ月以上経過観察可能であった202例（肺転移161例、肝転移41例）を解析対象とした。体幹部の転移性腫瘍に対する定位放射線治療の保険適応の条件は、3個以下（各々5cm以下）の肺または肝転移で他臓器に病変がないことである。

【結果】照射野内制御率において大腸・直腸癌からの転移が他の原発部位と比較して、肺転移では有意に不良であった。肺転移症例において投与線量の増加を試みたが、大腸・直腸癌の肺転移症例においては、48 Gy/4回から56 Gy/4回までの線量増加では腫瘍制御率の改善は認められなかった。

【結語】大腸・直腸癌以外の転移性腫瘍における定位放射線治療は、副作用の少ない有用な治療法と考える。大腸・直腸癌からの転移性腫瘍は現在当科では60 Gy/5回で治療を行っている。

13 肺がん手術症例の満足度調査

吉谷 克雄・小池 輝明・大和 靖
小池 輝元・鳥谷部真一*

県立がんセンター新潟病院呼吸器外科
新潟大学危機管理部*

【目的】肺がん術後患者にアンケートを行い満足度を調査した。

【対象と方法】肺がん術後の954例、年齢42歳から81歳を対象として、年齢、性別、合併症の有無と医師説明の理解、医師診療態度に対する満足度、看護師の態度や言葉かけに対する満足度、クリニカルパスの理解、診療に対する満足度への回答の相関を検討した。

【結果】「医師説明への理解」は87.4%に得られ、「医師の診療態度について」は98%に良好。「看護師の態度」は98.1%、「看護師の言葉かけ」も96.5%と良好。「クリニカルパスについて」は無回答の17%を含み24.2%が理解不十分。「診療について」は80.7%が「満足」と回答。満足度との関係は、医師の診療態度＞看護師の態度＞看護師の言葉かけ＞医師の説明への理解＞クリニカルパスの理解の順であった。

【まとめ】患者の満足度は、医師・看護師の診療態度や看護師の言葉かけが強く影響する。